



Timed Repeated Readings  
を通じて見る英語多読授業の読みの流暢さに対する  
効果

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2013-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 稲垣, スーチン, 稲垣, 俊史 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00005878">https://doi.org/10.24729/00005878</a>

# “Timed Repeated Readings”を通じて見る英語多読授業の読みの 流暢さに対する効果

稲垣 スーチン・稲垣 俊史

## 1. はじめに

言語習得におけるインプットの重要性は疑問の余地がない (Krashen, 1985)。ところが、日本のような外国語圏で英語を習得しようとする、インプットの不足が大きな障害となる (Inagaki, 2005)。そこで、外国語圏にいながら楽しんで大量の英語に触れることができる多読 (extensive reading) が注目されている (Day & Bamford, 1998; 稲垣・稲垣 2008; 古川・河手 2003; 酒井 2002; Waring, 2000)。我々はこれまでの研究で、大学における一学期間の多読を取り入れた授業により、英語習熟度テスト (ミシガンテスト) の総得点に有意な伸びが見られること (稲垣・稲垣 2008)、セクション別に見るとその効果は読解のみならず、聴解や文法にも及ぶことを示した (稲垣・稲垣 2009)。また、さらにもう一学期間多読を続けたクラスは、一学期目に見られた習熟度の伸びを維持していた (稲垣・稲垣 2011)。最後に、稲垣・稲垣 (2010) では、別の習熟度テスト (*Oxford Quick Placement Test*) を用い、多読を行ったクラスは行わなかったクラスより習熟度の伸びが大きいことを示した。これらの研究で、多読が英語力全般の向上をもたらすことが実証されたと言えるが、読むスピードの増加や語感の発達など、習熟度テストでは捉えきれない側面に関する効果も検証することが課題として残った (稲垣・稲垣 2011)。

そこで、本研究では、多読を取り入れた一学期間の授業に読みの流暢さを促す活動 (Timed Repeated Readings) を定期的に組み入れ、その活動を通して多読の読みの流暢さに対する効果を検証した。

## 2. Timed Repeated Readings

“Timed Repeated Readings” (以下 TRR) 「時間を計る繰り返し読み」は、多読授業の教室で使える様々な活動を紹介した Bamford and Day (2004) に、読む速度を増進する活動として紹介されている (pp. 186-189)。目的は、(a) 学習者が読むスピードを上げること、(b) 読みの流暢さに対する多読の効果を生徒や教師に判断させること、となっている。手順は次の通りである。(1) 教師が各生徒に手持ちの本で読み始める箇所を決めさせ、「始め」の合図で一斉に1分間黙読させる、(2) 1分が経過した時点で「止め」の合図を出し、生徒に読み終えた箇所に鉛筆でうすく“1”と記入させる、(3) 生徒に読み始めた位置に戻るよう指示し、「始め」の合図で再び1分間黙読させる、(4) 読み終えた箇所に“2”と記入させ、「始め」の合図でまた最初から1分間黙読させ、読み終えた箇所に“3”と記入させる。生徒は同じ箇所を三度読むことになるが、読むたびに読む語数が増えて行き、読む速度が速まるのを実感できるとされている。最後に、(5) 各生徒に一回目、二回目、三回目に読んだ語数を数えさせ表にまとめさせる。

### 3. 本研究

多読を取り入れた大学の英語クラス二つを対象に、TRR を通じて一学期の間に読みの速度がどのように変化したかを調べることにより、読みの流暢さに対する多読の効果を調査した。

#### 3.1. 研究方法

##### 3.1.1. 被験者

名古屋大学文学部に所属し、英語の授業を受講している2年生1クラス38人中、四回のTRR活動すべてに参加した23人（N群）、大阪府立大学看護学部所属し、英語の授業を受講している2年生1クラス56人中、四回のTRR活動すべてに参加した53人（F群）が対象となった。

##### 3.1.2. 研究計画

本研究は、N群を対象に2010年10月から2011年1月にかけての一学期（後期）に、F群を対象に2011年4月から2011年7月にかけての一学期（前期）に行われた。どちらのクラスにおいても、まず学期始めに一回目のTRRを行い、その後約一ヶ月おきに計四回のTRR活動を行った。手順はセクション2で紹介した手順にしたがって授業中に行い（所要時間各10分程度）、毎回学生に三度の読みの時間と読んだ本のタイトル、レベル、日付を記録させた。これらのデータは、多読のために読んだ本の記録用に学生に配布してあった“Reading Record Sheet”の裏面に記入させ、学期末に回収した。

各クラスとも教室外で主にグレイディッド・リーダーズ（Oxford 大学出版, Cambridge 大学出版, Macmillan, Penguin から出版された英語学習者用リーダー）を用いて多読を行った。両クラスとも最低限一週間に一冊の本を読み、ブックレポートを提出することを課されていた。各クラスとも読書量の最低限のノルマが課されていたが、N群は12冊、10万語（各リーダーの総語数はプリントで配布）、F群は12冊（語数のノルマはなし）であり、全員が最終的にこのノルマをクリアした。N群の読書量の平均は13万6千語、17冊で、F群の読んだ本の冊数は平均13冊であった。

#### 3.2. 結果

一学期間の四時点（Time 1~4）で行われたTRRの1~3回目の成績（1分間に読まれた語数）をF群とN群に分けて表1に示す。その結果をグラフにしたものが図1である。これらの結果からまず読み取れるのは、N群の語数がF群の語数より全般的に多いこと、両群のどの時点においても、1回目から3回目にかけて徐々に語数が増加していることである。

表1. TRRにおいて1分間に読まれた語数

	Timed Repeated Readings		
	1回目	2回目	3回目
F群 (n=53)			
Time 1	145.4 (44.8)	177.1 (52.5)	204.6 (61.9)
Time 2	154.5 (45.3)	188.6 (53.0)	213.2 (65.4)
Time 3	158.6 (37.7)	186.6 (42.0)	209.0 (48.9)
Time 4	158.9 (38.1)	185.6 (49.2)	212.0 (60.1)
N群 (n=23)			
Time 1	167.3 (39.1)	208.0 (50.6)	230.5 (54.9)
Time 2	172.1 (41.7)	212.0 (44.9)	234.8 (50.1)
Time 3	177.5 (37.6)	213.1 (48.0)	236.3 (58.1)
Time 4	188.0 (33.7)	215.7 (42.6)	250.9 (51.4)

注：( )内は標準偏差

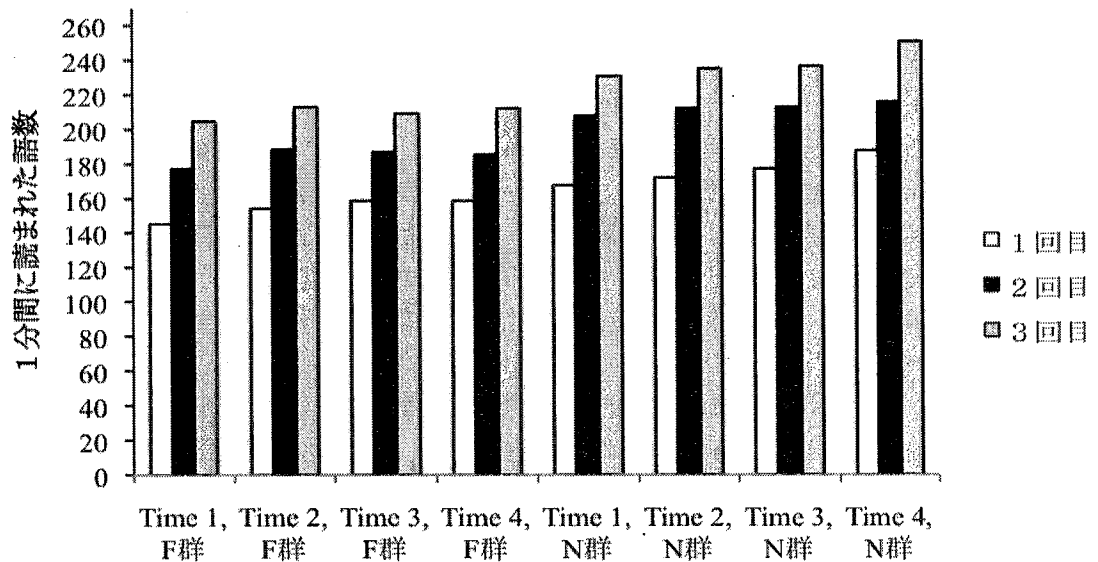


図1. 1分間に読まれた語数の推移

実際、グループ (F群、N群)、回数 (1回目、2回目、3回目)、時間 (Time 1、Time 2、Time 3、Time 4) を独立変数として繰り返しのある3要因の分散分析を行ったところ、グループの有意な効果があり ( $F(1, 74)=6.63, p<.05$ )、読みの流暢さにおいてN群がF群より優れていたことが示された。また、回数の効果も有意であり ( $F(2, 148)=225.60, p<.01$ )、事前比較の結果、すべての回数間に有意な差があった (1回目対2回目:  $F(2, 75)=142.70, p<.01$ ; 1回目対3回目:  $F(2, 75)=448.76, p<.01$ ; 2回目対3回目:  $F(2, 75)=85.35, p<.01$ )。このことから、TRRにおいて読みを繰り返すたびに読みの速度が増したことがわかる。時間の主効果も有意であった ( $F(3, 222)=2.66, p<.05$ ) が、事前比較により有意差が示さ

れたのは最初 (Time 1) と最後 (Time 4) の間のみであった ( $F(1, 75)=7.84, p<.01$ )。これは、Time 1からTime 4にかけて読みの流暢さが (大幅ではないが) 徐々に増加したことを示している。

交互作用 (グループ x 回数、グループ x 時間、回数 x 時間、グループ x 回数 x 時間) には有意な効果は認められず、学期初めから両群間に見られた読みの速度の差が学期末まで維持された以外は、二グループ間に違いはなく、同様なパターンで変化したと言える。

#### 4. 考察

本研究では、多読の読みの流暢さに対する効果を検証する目的で、多読を導入している大学二年生の英語二クラスを対象に、一学期の授業期間中に月に一度の割合で四度 TRR を実施した。その結果、緩やかではあるが読む速度が増し、学期の終わりには学期の始めに比べて読む速度が有意に増加していた。したがって、一学期間の多読により読みの流暢さが向上したと言える。我々の先行研究 (稲垣・稲垣 2008, 2009, 2010, 2011) では、習熟度テストの成績に基づき多読が英語習熟度全般を向上させることを示したが、今回、別の指標を用いて習熟度テストでは捉えきれなかった読みの流暢さに対する多読の効果を示したことは意義深いと言えよう。

ところが、本研究で示された多読の効果は、かなり限られたものであったことは認めざるをえない。かろうじて学期の終わり (Time 4) に、学期の始め (Time 1) との間に有意な差が現れたが、他の時点の比較では有意な差が得られなかった。これは、これまでの多読を実践してきた我々の実感と隔たりがあり、期待を下回るものであった。これまでの多読授業の実践において、「前よりスラスラと英語の本が読めるようになった」とコメントする学生は多く、多読の効果が最も出やすいのは読みの流暢さに対してではないかと感じていたからである。

それでは、なぜ本研究では限られた効果しか現れなかったのであろうか。その理由は読みの速度の指標として TRR を用いたためであろうと思われる。1分という短い時間に読める語数は限られており、たとえ読む速度が上がっても、その上昇分が1分間に読まれる語数に反映されるのはわずかであろう。実際、本研究の結果 (表1、図1) を見ると、F群は毎分140~220語で、N群は毎分160~260語でほぼ安定しているようである。Bamford and Day (2004, p. 186) は、上級レベルでは1回の読みを2分か3分に延ばして TRR を行うことができると述べているが、本研究でも、もし1回の読み時間をもっと長くしていればより顕著な効果が現れていたかもしれない。いずれにせよ、今後よりよい読みの流暢さの指標を開発する必要があるだろう。

最後に、今回の TRR の実践によりこの活動の有効性を実感したことを付け加えたい。本研究の結果が示すように、読む速度は繰り返し読みの過程で間違いなく増加し、それにより生徒は流暢な読みを体感できる。さらに、授業で習慣的に TRR を行うことは、生徒にとって教室外で多読を行うインセンティブになるようである。また、時間を計りながら1分間集中して読むこと自体エキサイティングな活動である。何より、教師にとってタイマーかストップウォッチと本さえあればできる、準備に手間がかからない「楽な」

活動である。

## 謝辞

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (C) (平成 21 年度～平成 23 年度)「英語多読授業の短期的、長期的効果に関する実証的研究」(課題番号: 21520586) の助成を受けて行った。この場をお借りして謝意を表したい。

## 参考文献

- Bamford, J., & Day, R. R. (2004). *Extensive reading activities for teaching language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Day, R. R., & Bamford, J. (1998). *Extensive reading in the second language classroom*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 古川昭夫・河手真理子 (2003). 『今日から読みます英語100万語!』日本実業出版者.
- 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2008). 「日本の大学におけるグレイデッド・リーダーズを用いた英語多読授業の効果に関する実証的研究」『言語と文化』第7号, pp. 41-49, 大阪府立大学総合教育研究機構.
- 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2009). 「英語多読授業の効果—ミシガンテストのセクション別得点の伸びから—」『言語と文化』第8号, pp. 35-43, 大阪府立大学総合教育研究機構.
- 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2010). 「多読は効果的である—日本の大学英語教育におけるさらなる証拠—」『言語と文化』第9号, pp. 49-53, 大阪府立大学総合教育研究機構.
- 稲垣スーチン・稲垣俊史 (2011). 「日本の大学における通年の多読授業の効果に関する実証的研究」『言語と文化』第10号, pp. 103-109, 大阪府立大学総合教育研究機構.
- Inagaki, S. (2005). How long does it take for Japanese speakers to learn English? *The Language Center Journal*, 4, 19-29. Osaka Prefecture University.
- Krashen, S. D. (1985). *The Input Hypothesis: Issues and implications*. London: Longman.
- 酒井邦秀 (2002). 『快読100万語! ペーパーバックへの道』ちくま学芸文庫.
- Waring, R. (2000). *The Oxford University Press Guide to the 'why' and 'how' of using graded readers*. Oxford University Press, Japan.